

ルカの福音書 2 章 8～20 節を今朝の午前礼拝のテキストにしておりますので、そちらをお開き下さい。今年最後の午前礼拝と先程言いましたけれども、ここは勿論キリストの降誕の記事で、今から話す事はクリスマスのメッセージといった内容になっております。でもクリスマスのメッセージにはちょっと早すぎるんじゃないですかと、まだ 11 月ですよと、言う人もいますけれども、でもケンタッキーフライドチキンを見て下さい。カーネルサンダースは既にサンタクロースの赤い服を着て、もうクリスマス気分を既に醸し出しているわけです。巷ではもう既にクリスマスの装いをしているわけです。教会は出遅れた感がありますけれども、待ち切れないほどに私たちはクリスマスのことをもっともっと楽しみにして期待をして、そして本当に喜びを知る者として盛大にお祝いすべきであろうかと思えます。ですから待ち切れない思いもあって、今朝はクリスマスの箇所を皆さんにお届けしたいと思います。改めてこの記事を読んで学んで、そしてまだこのクリスマスの意味を知らない人たちに、この喜びを知らない人たちに是非分かち合ってもらいたい。そういう願いも込めて今から皆さんにお分かちして行きたいと思えます。

さっそく 2 章 8 節から読んで行きたいと思えます。『さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。』“この土地”というのは、少し前の 4 節を見て頂くと“ユダヤのベツレヘム”とあります。これはダビデの町とも呼ばれています。ダビデ王が生まれた町がベツレヘムと言います。ユダヤのベツレヘム。その郊外に羊飼いたちが羊の群れを飼っていたわけです。放牧していたわけです。そして、このベツレヘム郊外の羊の群れというのは、エルサレム神殿が所有していた生費用の羊でありました。ベツレヘムの郊外で飼われていた羊というのは、食肉用とか、また羊毛を刈るための羊というよりも、神殿において神に生贄を捧げる時に用いる生費用の、犠牲用のその羊を飼っていたというのが歴史的に分かっております。最高の羊でなければいけません。シミやシワや傷が何一つない最高の羊が神の生贄として唯一受け入れられるものですから、細心の注意を払ってこのベツレヘムの羊飼いたちは羊の世話をしていたと思われまます。この羊たちは神への生贄として、供え物として、礼拝として捧げられるために生まれてきた羊であります。育てられてきた羊であります。

聖書では、私たち人間は羊にたとえられております。ローマ 12:1 には、私たちは神に受け入れられる生きた供え物です。羊として私たちも神を礼拝するために生まれて、育てられて、今ここに集められているわけです。私たちの存在目的は、自分自身を神に受け入れられる生きた供え物として捧げるためです。そのために今朝礼拝に皆さんは集められて来たわけです。

話を戻しますと、この羊飼いたちは夜番をしていたとあります。クリスマスの記事なんですけれども、12月25日がクリスマスだと一般的には考えられておりますけれども、聖書の記述からしますとそれはちょっとあり得ないという話になります。と言いますのは、12月には羊飼いたちは夜番をしないからです。そういう習慣はありませんでした。寒過ぎたわけです。ですからイエスの誕生は12月25日ではなくて、恐らくは9月頃であろうかと聖書学者たちの間では推測されております。厳密に9月何日かという議論については今ここでは割愛させていただきます。その辺の議論もなされているんですけども、それが今重要な話ではありません。ただイエス・キリストが確かに歴史に介入されてこの世に来て下さった。これは事実であります。キリストは実在の人物としてユダヤのベツレヘムに今から約2000年前にお生まれになって下さいました。

そして、そのキリストが誕生するという素晴らしいグッドニュースをまず初めに聞かされたのは羊飼いたちでありました。救い主の誕生の知らせを最初に聞いて、最初のクリスマス<sup>あずか</sup>を祝う特権に与った者たち。さぞかし身分の高い人たちではないでしょうか。さぞかし社会的な影響力のある人たちではないでしょうか。特別なVIPのようなそういう人たちではないでしょうか。皆さん思われると思うんですが、そうではなくて一介の羊飼いたちが最初にクリスマスのニュースを聞いた人たちでありました。

当時羊飼いという職業は、社会的には蔑<sup>さげす</sup>まれていた、軽蔑されていたものでありました。なぜならば、彼らは宗教

上儀式的に汚れたものと見なされていたからです。これはユダヤ教の上で羊飼という職業は、儀式的に汚れた職業と見なされていました。神殿用の生贄を世話する羊飼ではあったんですけども、皮肉なことに彼らは儀式的には汚れているとされていましたので、エルサレム神殿で自由に礼拝を捧げることは許されておりませんでした。でも、にもかかわらずキリストの降誕のグッドニュースをこのような羊飼たちが真っ先に耳にしたというのは素晴らしいことでもあります。社会的に軽蔑された人たち。そんな彼らにクリスマスのメッセージは最初に届けられました。礼拝とは程遠い人たちに、教会とはむしろ最も離れている無縁と言えるような人たちにクリスマスのグッドニュースが伝えられたということは注目すべきであります。完全にはみ出し者、見捨てられた者たち。そんな人たちにクリスマスのメッセージが真っ先に届けられた。その話を是非私たちは自分にも当てはめて、周囲の人たちにも当てはめて捉えなくてはなりません。私のような者にもクリスマスのメッセージは届けられたんだと。そして、あの人たちにもクリスマスのメッセージは届けられるべきなんだ、ということも覚えて欲しいと思います。ちなみにクリスマスという名称は、キリスト・ミサという言葉から来ています。キリストは油注がれた者。イエスの苗字ではありません。キリストは称号・尊称・タイトルであります。油注がれた者。古代イスラエルにおいては、それは王であり祭司であり預言者を表す称号・尊称でありました。イエス・キリストは王であり、祭司であり、預言者である。それがキリストという意味です。そして、ミサというのはカトリックで使っている言葉です。よく「日曜日にミサに行きます。」と、今朝もカトリック教会ではミサが行われているわけですが、ミサというのはプロテスタントで言うところの所謂礼拝ということです。厳密には「解散する」という言葉から、ラテン語から来ているんですけども、でもそれはミサに集まって解散する時、“ミッサ”というふうに言うわけですけども、そのミサというのは本質的には、教会に集まってイエス・キリストの御体であるパンとそして血潮である杯に与る。そういう宗教儀礼のことを指して、カトリックでは礼拝と見ているわけです。ですから端的にクリスマスというのは、キリスト・ミサ、キリスト礼拝と説明出来るわけです。クリスマスはキリスト礼拝である。礼拝から最も離れていた、遠ざけられていたような人たちにこのキリスト礼拝の、クリスマスのメッセージが届けられたということは、注目すべきであります。

ちなみに羊飼というのはギリシャ語では“ポイメーン”と言います。“ポイメーン”という言葉は、「牧師」とも訳せる言葉です。牧師というのは、単純には羊飼いなんです。ですから私はこの羊飼いたちに自分の姿も重ねて見るわけです。その辺の話はまた後半の方にしたいと思うんですけども、早速次の節、**9 節**の方にまずは移って行きたいと思えます。『**9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。**』“主の使い”というのは勿論御使い、天使と呼ばれる霊的な存在です。そして“主の栄光”という言葉は、これは旧約聖書の専門用語であります。例えば、「**会見の天幕に満ちた主の栄光**」というふうな言い方がされます。それは雲のように目で認められるような、また肌で感じられるような、実体の伴うような栄光。それを“主の栄光”と旧約聖書では呼ばれております。出エジプト記 **40:34** にその言葉が使われております。“主の栄光”そこには、開いて頂くと分かるんですけども、太字の主の栄光となっています。太字の主というのは神様の固有名詞、個人名である“ヤーウェ”を表しております。“ヤーウェ”という名前の意味は、『**わたしはある**』というものである』と。かつてモーセが荒野で燃える柴の中から聞いた神の個人名。これが“ヤーウェ”『**わたしはある**』というものである』。出エジプト記 **3 章**にそのことが記録されております。

また、会見の天幕の後に、幕屋と呼ばれるものですが、その後にダビデがイスラエルの統一王となってエルサレムを首都としてから、ダビデの子どもであるソロモンが会見の天幕から神殿を新たに建設するようになって、それはソロモン神殿とも呼ばれるものとなりました。そこにやはり“主の栄光”が満ちたという記録も**第一列王記 8:11** にあります。そこにも同じように“主の栄光が満ちた”と。それはまるで雲のように目で確認出来るような、肌で感じ取れるようなもの。ヘブル語で“栄光”のことを「カボツドゥ」と言います。「カボツドゥ」というのは、「重み」という原意があります。神の栄光が重い、ヘビーだというふうに感覚的に捉えられるものとして現れた。それを専門用語では「シカイナ・グローリー」とも言います。「シカイナ・グローリー」という言葉がよくキリスト教用語で使われます。それは、主の栄光のこと。特に重みのある、実体の伴うような肌で感じられるほどの神様の臨在のことを言います。それが満ち満ちたわ

けです。旧約聖書でそのような記述を羊飼いたちはもしかしたら読んでいたかもしれませんが、どこかで耳にしていたかもしれませんが。かつては会見の天幕、幕屋の中に満ちたあの主の栄光が。またかつてはソロモン神殿に満ちたあの主の栄光が、今日の前に、自分たちの職場に感じ取られたわけです。見えるようになったわけです。それは勿論驚くべきことです。神殿から最も離れていたそんな彼らの目の前に主の栄光が充ち満ちたわけです。驚きは隠せません。

10 節に『御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。』すばらしい喜び。これがクリスマスの本質であります。クリスマスのメッセージは、素晴らしい喜びのニュース、グッドニュースであります。

11 節に『きょうダビデの町で(すなわちベツレヘムで)、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。』あなたがたのために、とあります。イエスはヨセフとマリヤの子どもとして育てられていくんですけれども、通常赤ちゃんが生まれたら、それはお父さんお母さんのために生まれたというふうに見なされるころがあると思うんですけれども、この赤ちゃんは特別でした。この赤ちゃんの父親は勿論ヨセフではありません。ヨセフはあくまで育ての親、養父でありました。実は母はマリヤでありましたが、マリヤは聖霊によって身ごもって、処女でありながらも神の御子を宿して、そして産んだ母となったわけです。そのヨセフとマリヤのためにイエスは生まれたのではなくて、あなたがたのため。ここでは、勿論第一義的には羊飼いたちのために御子は救い主として、主キリストとしてお生まれになったのだと。救い主は説明する必要はないと思うんですけれども、ただこれは単純に地獄から救って天国に入れてくれるという救い主だけを指すものではありません。ここで言われている救い主という言葉は、ありとあらゆる苦境から救ってくれる存在。地獄から救って頂ければ充分でありますけれども、でも今皆さんは目に見える現実の世界で、社会生活の中で、家庭生活の中で様々な局面に、今もしかしたら試練の嵐のような本当に辛い苦しい逆境に立たされている人もいるかもしれません。仕事の上でも今ピンチなんです。健康面でも今ピンチなんです。でもそういったありとあらゆる苦境の中から救って下さるのがここで言われている救い主であります。そして主キリストというふうにも呼ばれておりますが、“主”というのは勿論旧約聖書の神の名前である“ヤーウエ”を表してあります。ここでは勿論ギリシャ語が使われていますから、ギリシャ語では“クーリオス”というんですけれども、これは前節の主の栄光という言葉を受けておりますので、旧約聖書の主、太字の主、“ヤーウエ”ということが分かります。イエス・キリストは“ヤーウエ”。『「わたしはある」というものである』そのお方であると。“イエス”という名前の意味は、これもユダヤ人のヘブル名ですけれども本来は“イエシュア”と言って、その意味は「ヤーウエは救い」と言います。イエスの名前の意味は「ヤーウエは救い」。キリストは「油注がれた者」、ヘブル語では「メシアハ」と言います。「メサイア」と英語で言います。キリストのことです。それがイエス・キリストの名前。また肩書きのそれぞれの意味がありますが、このイエス・キリストは実は羊飼いであります。イエスはご自分で「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のために命を捨てます。」とおっしゃいました。ヨハネの福音書 10 章 11 節の言葉です。『わたしは良い牧者です。』良い羊飼いだと言ったわけです。そして良い牧者は羊のために命を捨てると。『わたしは良い牧者』という言葉は、実は『「わたしはある」というものである』というヤーウエ宣言でもあるんです。『「わたしはある」というものである。良い牧者です。』というのがそこでの厳密な訳です。ですからイエスは何度となく「わたしこそが、あの燃える柴の中でモーセに呼びかけた神である。」と。その神が私たちと同じ人間の姿をとってクリスマスにこの世に来て下さったわけです。ですからイエスは『「わたしはある」というものである』そういう不可解な名前を持つ神が、具体的にはどんな神であるのか。私たちに分かる形で実証されたわけです。証しされたわけです。「わたしは世の光です。」とか、または「わたしはいのちのパンです。」とか、または「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」とか。それらはすべて『「わたしはある」というものである』というヤーウエ宣言の一つ一つであります。ですからイエスは実質「わたしは主である。わたしは旧約聖書に登場している神である。」と言っているわけです。

そして同時にイエス・キリストは、羊でもあったんです。羊飼いであり、羊にも成られた方。それはキリストの二面性を表しています。神でもあり人間でもある。ヨハネの福音書 1:29 には、バプテスマのヨハネが、半年年下のいとこ

でもあったイエスを指差して『見よ。世の罪を取り除く神の小羊』と宣言しました。イエスは世の罪を、私たちの罪を取り除く神の小羊であると。良い羊飼いは、良い牧者は、羊のために命を捨てます。そしてイエスは同時に世の罪を取り除く神の小羊として死んで下さったわけです。羊飼いが羊になったわけです。神が人間となったわけです。それがクリスマスであります。

**12 節。**『あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。』布にくるまって飼葉おけに寝かされている姿が救い主としてのしるしである、サインである。それは羊飼いにしか分からない暗号のようなものだったということが分かります。当時の羊飼いであれば、それは特別な意味であることをすぐに察知出来ました。当時家畜は夜間は皆近所の<sup>ほらあな</sup>洞穴に集められて、その中で飼われていたわけです。その中には勿論飼葉おけも置かれているわけです。イエスはそのようなところでお生まれになったということが分かります。羊飼いであればどこにそのような家畜を集める穴があるのか。ベツレヘム郊外でそれは決まったところにしかなかったということでもあります。そして、布にくるまっている、というのもこれも興味深いことで、当時は旅人か何か、見知らぬ人が行き倒れになってしまった場合、遺体を葬る際には洞穴が使用されたわけです。家畜を収めていく同じ洞穴が墓地としても利用されたわけです。そういった墓地には、すなわちそういった洞穴には常に遺体をぐるぐる巻く亜麻布というものが常備されていました。私たち日本人の感覚で言うならば、お棺がいつも用意されていたということです。家畜小屋にお棺があったと、棺があったということです。そのような遺体をぐるぐる巻くところの布で生まれたばかりの新生児が巻かれたわけです。産着が言わば遺体を巻く亜麻布。ベビーベッドがお棺だったということです。これは特別なしるしだとしか言いようがありません。あり得ないことです。誰も生まれたばかりの赤ちゃんをお棺に入れるような人はいないわけです。ですからそれは羊飼いたちにとっては間違いようのない特別なスペシャルなサインだったわけです。すぐに場所も分かりました。特定出来たわけです。でもこれはただ単に特別なサインというだけではなく、特別な意味がありました。この赤ちゃんは実は死ぬために生まれてきたんだ、ということです。救い主は私たちの罪を十字架の上に負って、そして死んで葬られて、イエスはこの後およそ 30 数年後に十字架につけられて、そして洞穴に亜麻布でぐるぐる巻きにされた状態で葬られていきます。そのことが既に誕生したその時から予見されていたわけです。そのようにイエス・キリストは死ぬために生まれて来て下さった特別な赤ちゃんであったということです。そのお方が飼葉おけの中に寝かされていた。餌入れです。皆さんにも家にはペットがいるかもしれませんが、犬の餌入れの中に、猫の餌入れの中に生まれたての赤ちゃんが入られる。ちょっと考えられないことです。非常に不衛生な状況です。飼葉おけというのは木で出来ているのではありません。家畜小屋と言うと私たちは木で出来た建物で、飼葉おけも木で出来たものと想像するかもしれませんが、先ほども説明したように家畜小屋というのは洞穴でした。真っ暗な冷たい暗いところです。その中の飼葉おけも同じように石をくり抜いたものでありました。木であったならば少しは温もりがあったかもしれませんが、石ですから冷たくて、固くて、そして汚いわけです。そのようなものの中に、死体を巻くところの亜麻布でぐるぐる巻きにされて、この赤ちゃんは、私たちの救い主は置かれて、寝かされていたわけです。

次に **13 節、14 節**をお読みします。『<sup>13</sup>すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。<sup>14</sup>いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。』これが最初のクリスマスキャロルであります。作詞は神様です。歌手たちは天の軍勢、これは御使い、天使たちであります。大合唱を捧げています。『いと高き所に、栄光が、神にあるように。』ラテン語では、ここは皆さんもクリスマスキャロルでよく歌っているところなんですけれども、「グローリア、インエクセルシス、デオ」これが『いと高き所に、栄光が、神にあるように。』という意味であります。神に栄光が帰せられると、地上の私たちの心には平和が、平安がやってきます。平安を得る秘訣は神に栄光を帰すことでもあります。今この中にクリスマスシーズンを迎えながらも「私には平安がありません。今の状況は平和とは程遠い。家庭の中も戦争状態です。うちの夫と妻と毎日のように言い合っています。親子の間でいがみ合っています。親戚の間で、兄弟の間でいがみ合っています。」とか。または職場で「どこにいても私には平和がありません。私の心には平安がありません。先々のことを考えるともう不安

で不安で仕方がないんです。」そういう人にはグッドニュースがあります。この御使いたちのように神に栄光を帰して下さい。神をあがめて賛美してみてください。そうすると不思議と地上のあなたの心に平安がやってきます。

そして 15 節、16 節を見て欲しいと思います。『<sup>15</sup>御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせて下さったこの出来事を見て来よう。」<sup>16</sup>そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。』彼らはすぐにしるしを理解して、イエスを捜し当てたわけです。

17 節で『それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。』『それを見たとき、知らせた。』とあります。これが伝道の本質であります。イエス・キリストのことを知らせたい。そのためにはあなたが先ずイエスを見なければいけません。見てもない方のことを、聞いてもない方のことをいくら「伝道しなさい。教会に未信者を連れて来なさい。沢山のの人に福音伝道しなさい。」と発破をかけられて強制されても、もしあなたがイエス・キリストを見たこともないならば、イエス・キリストと出会っていないならば、イエスとリアルな出会いをしていなければ、体験をしていなければ、誰にも自信を持って確信を持ってイエス・キリストのことを伝えることは出来ません。クリスマスのメッセージを届ける為には、まずはあなたがクリスマスを見なければ、体験しなければいけません。

次に 18～20 節を見て下さい。『<sup>18</sup>それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。(本来であれば羊飼いたちは当時は見下げられていて、法廷では証人としても用いられなかったわけです。あまりにも信用ならない人たちというふうな見下げられ方をしていましたので、法廷でも証人としては認められなかったような人たちがクリスマスの証人として語ったこと。それは人々を驚かせました。これは嘘偽りではない。本当のことなんだと。)<sup>19</sup>しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。<sup>20</sup>羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。』クリスマスの知らせを受けた者のリアクションです。神をあがめ、賛美しながら帰って行った。クリスマスに教会に集まって神をあがめ賛美します。でも帰りの道はどうでしょうか。「ああ、これでようやくクリスマスが終わった。」それまでに沢山の時間をかけ、労力をかけ、お金をかけてクリスマスの礼拝のための準備、お祝いのための準備をして一生懸命働いて、そして礼拝が終わったらもう燃え尽きたかのように「ああ、ようやく終わった。ほっとした。」それで家に帰っているようでは、本当の意味でクリスマスをお祝いしたことにはなりません。むしろ家に帰るその帰り道ですら神をあがめながら賛美して帰る。ようやく終わったのではありません。そこからが始まりであります。

これで 20 節まで見て「ああ、今日のメッセージは短かった。良かった。」と思っている人もいると思うんですが、そうはいかないのがこの教会の特徴でありまして、一般の教会であればこれでちょうどめでたしめでたしで終わるんですけども。

最後に、ここに出てくる羊飼いたちは、ギリシャ語で“ポイメーン”です。それは“牧師”とも訳せる言葉だったと言いました。牧師である私はこの羊飼いたちと非常に近い存在に今置かれているように思っております。この記事を読む時に私は特に羊飼いの気持ちに立って読めるわけです。皆さんもそのように読まれることもあると思うんですけども、特に職業柄私も羊飼いと呼ばれる者ですので、彼らの気持ちに立ってこのストーリーを改めて今回じっくりと読んでみました。彼らが最初のクリスマスの知らせを聞いたわけです。当然それは信じ難いことであり、驚くべきことであり、感激・感動、本当にこれはもう黙ってなんかいられない。急いで行って町の人たちに知らせなければ。そういう心境になったのは必然だと思います。「自分たちのような者に旧約聖書の中に約束されていたメシヤの誕生の知らせが真っ先に知らされるなんて、信じ難いけれども有り難いことである。人から信用されなくたっていい。法廷で証人として認められていないけれども、それでも構わない。私たちは見た事はこれは全て真実である。人からどう思われたって構わない。」彼らは急いでベツレヘムの町に行ったわけです。その際には勿論羊も置いていったわけです。「急いで町の人に知らせたいところだけれども、私には仕事がある。ビジネスが大事なんだ。誰が羊の面倒を見るのか。」そんなことを羊飼いたちは一切心配していませんでした。「これは主が知らせて下さったメッセージである。主が私に羊飼いの仕事を与え、主が私のために羊を与え、この大地も自然もすべて主が造られたもの。」その主が

知らせて下さったメッセージを「羊がいるから、羊を世話しなければいけないから、仕事があるから、黙っている、後回しにする、知らせないでおく。それはあり得ない。」というのが彼らの心境でありました。

でも次の年にもう一度御使いがやって来て、クリスマスのメッセージを彼らに告げたらどうでしょうか。去年もそれは聞いたけれども、でもクリスマスは確かに素晴らしい。去年ほどは急いでは町には行かずに、(去年は多分ダッシュで行ったと思います。)でも今年はちょっとランニングする程度。次の年はどうでしょうか。3年目になって改めてまた御使いが同じシーズンにクリスマスの知らせを告げ知らせにやって来ました。これで3回目。でもやっぱりクリスマスのニュースは素晴らしいから、やっぱり伝えに行こう。でも前年よりもちょっとはその感動も冷めてしまって、ランニングどころかジョギング程度の速さで町に知らせに行ったと思います。4年目、5年目、6年目、7年目、8年目と毎年のようにクリスマスのメッセージが聞かされるわけです。だんだんその喜びも冷めてきてしまうのではないかと。皆さんはどうでしょうか。羊飼いの立場に自分の身を置いてみて下さい。例年のように、毎年のように同じ時期に同じメッセージを聞かされるわけです。その喜びは最初に聞いた時よりも徐々に冷めていってしまうような、そんな感覚は皆さんの中にはないでしょうか。私は長野に来てこれで14年目です。97年の11月に初めて長野に来て、その時から牧師を始めました。ですから既に14回教会においてクリスマスのメッセージを語っていることになります。最低でも14回は既に語っているわけです。勿論それ以上語っているんですが、よくネタが尽きないですね、と言われるかもしれません。毎年クリスマスに、クリスマスのメッセージをする。中には同じメッセージしかしない牧師もいるかもしれませんが、でも皆さんはどうでしょうか。毎年毎年クリスマス。もういい加減飽きた。もう分かっている。お決まりのストーリー。喜びもだんだん冷めて、だんだん色褪せてきている人も中にはあるかもしれません。でも、そんなあなたにもう一度クリスマスの喜びを呼び覚ましたいと思います。第一ペテロ1章8節をお開き頂きたいと思います。『あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。』すべてのクリスチャンは、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどるものだと、ここに書かれています。皆さんはどうでしょうか。ここに描写されているような喜びを今味わっているでしょうか。もしイエス・キリストがこの私の心の中に生まれて下さらなかったのなら、今私はここには立っておりません。皆さんには絶対に出会うことはなかったでしょう。多分立っているどころか、地の下に埋められていると思います。勿論焼かれて。もしかしたら山中かどこかに遺体が投げ捨てられて。本当にそういう生活をしていたんです。イエス・キリストが私の心に生まれて下さらなかったならば、私はどうに誰かに殺されていたか、自分で自分の命を断っていたか。そのどちらかであります。私にとってはこのクリスマスのメッセージは、ですから決して色褪せるようなものではありません。私のような暗い冷たい固い心の中にイエス・キリストが生まれて下さった。そのことを思う時に毎年同じメッセージを聞かされても私の心は喜びで溢れてきます。もしイエス・キリストが私の心のうちに生まれて下さらなかったのなら、私は妻とは結婚していませんでした。考えられません。もし私が妻と結婚していなかったならば、どんな生活をしていたのか考えられません。生きていたとしたら、物凄い惨めな生活をしていたと思います。本当に有難い存在だと、今は妻との生活もすべてイエス・キリストが私の心のうちに生まれて下さったからこそ与えられたものだということが分かるようになりました。そのようにして皆さんも、もしイエス・キリストが自分の心のうちに生まれて下さらなかったのなら、という仮定を自分自身に当てはめてみて、今胸に手を当てて考えて頂きたいと思います。言い換えれば、自分がクリスチャンでなかったならばということです。今頃はあなたはどうだったでしょうか。もしかしたら今頃は飲んだくれで、日曜日の朝と言ったらもう二日酔いです。教会なんか絶対に行っていなかったはずだ。クリスマスの喜びなんか知らなかったはずだ。礼拝のこんな素晴らしい体験など絶対にしていなかったはずだと。今頃はテレビでも見てひっくり返っている。今頃は場合によっては私は牢屋の中だったかもしれない。犯罪者だったかもしれないということです。今頃は私はどうだったのか。路頭に迷っていたかもしれない。今頃はアルコール中毒者、ポルノ中毒者、性的倒錯者。自殺していたかもしれない。いろいろと考えられることはあるかと思えます。キリストは私のような者の心の中にも生まれて下さいました。あなたのような者の内にもキリストは生まれて下さいました。

エレミヤ 17:9 をお読みしたいと思います。『人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。』私たちの心は、陰険だと。洞穴のように薄暗い、陰険だと。口語訳聖書ではこの部分は『心はよろずの物よりも(ありとあらゆる物よりも)偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか。』とあります。人の心はすぐに偽る。はなはだしく悪に染まっているんだと、口語訳は訳しております。新共同訳聖書では『人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。(すべての人の心は歪んでいるんだと。病んでいるんだと。)誰がそれを知りえようか。』と新共同訳は訳しております。それが私たちの心です。何よりも陰険で、よろずの物よりも偽るもので、それはとらえ難く病んでいて、はなはだしく悪に染まっている。そんな心の中に私たちの救い主は生まれて下さいました。

他にも新約聖書マルコの福音書 7:21~23 に私たちの心の状態が赤裸々に描かれております。『<sup>21</sup>内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行(ギリシャ語で言う“ポルネイヤ”ポルノグラフィの語源です。性を売り物にするような罪です。)、盗み、殺人、<sup>22</sup> 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、<sup>23</sup> これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。』と。これが私たちの心の中のコンディションです。「私の心はそんなに汚くありません。」と、あなたは言うかもしれませんが、それはまさにエレミヤ 17 章で読んだ通りです。心はよろずの物よりも偽るのです。「私の心には一片の曇りもない。」嘘です。主はあなたの心を見えています。いくら外見をきれいに装っても、いくら敬虔なクリスチャンのなりをしても、あなたの心は主がご存知です。私の心は主がご存知です。陰険です。何よりも偽るものです。とらえ難く病んでいます。そして、ありとあらゆる悪に満ちています。汚いです。

でもそんな心の中に罪のない方が、イエス・キリストが生まれて下さった。これがグッドニュースであります。もしイエス・キリストが私の心のうちに生まれて下さらなかったならば、私はここにいませんし、皆さんも勿論ここにはいないと思います。MGF は、マラナサ・グレース・フェロシップは存在していなかったと思います。そして KFC も存在していなかったと思います。ケンタッキーフライドチキンのことです。というのはカーネルサンダースという人の心の中にもイエス・キリストが生まれて下さったからです。彼がクリスチャンにならなければ、ケンタッキーフライドチキンは、多分今はありません。何度も事業に失敗して、でも彼はクリスチャンとしての信仰に目覚めてケンタッキーフライドチキンという世界的なフランチャイズを展開するまでに至りました。それも信仰から出たことであります。ですから、私は有難いです。ケンタッキーフライドチキンが食べられるのは、カーネルサンダースの心のうちにイエス・キリストが生まれて下さったから。冗談のように聞こえるかもしれませんが、皆さんも考えてみて下さい。隣の人はどうでしょうか。イエス・キリストが彼の、彼女の心の中に生まれて下さらなかったのならば、今隣にいないということを想定してみてください。イエス・キリストがアンリー・デュナンという人の心の中に生まれて下さらなかったならば、日本赤十字社はありませんでした。なぜならば、アンリー・デュナンという人は赤十字の父と呼ばれている人です。彼もクリスチャンです。もし彼がクリスチャンでなければ、赤十字は生まれていなかったと言っても差し支えないと思います。軽井沢もなかったと思います。軽井沢から来ている人たちもいますけれども、もし軽井沢の、あのアレクサンダー・クロフト・ショー宣教師が開拓したわけです。彼がクリスチャンとして、宣教師として日本に来なければ、軽井沢は見捨てられた地としてリゾート地からは程遠い何もない閑散とした何の産業もないつまらない小村で、誰からも見向きもされないような所だったと思います。信濃町もそうです。信濃町も今は信州鎌だとか、夏には甘いとうもろこしを食べにわざわざ遠出する人もいますと思いますが、それらもすべて宣教師がもたらしたものです。アルフレッド・ラッセル・ストーンという人の話は前にもしたことがあると思いますが、『氷点』にも出てくる人です。函館沖の洞爺丸が沈みかけている時に、そこに乗り合わせたストーン宣教師は見知らぬ日本人の人に自分の救命胴衣を渡して、そしてその人の命を救うために海の藻屑となっていきました。そのようなストーン宣教師が信濃町にそのような産業を伝えてくれなければ、信濃町もやはり。また野尻湖もそうです。ダニエル・ノルマンという宣教師が国際村というところを開いてくれたわけですが、その 2 名の宣教師がいなければ、信濃町なんか今存在していなかったかもしれません。そういったことを一つ一つ考えて頂くと、イエス・キリストが生まれて来て下さったことがどんなに有り難いことなのか、皆さん

にも少しは伝わると思います。

そうすると、毎年毎年同じようなクリスマスの時期に、同じようなメッセージを聞かされても、それらは色褪せていくことはないと思います。むしろ歳を重ねれば重ねるほど、クリスマスの素晴らしい喜びのメッセージはさらに新鮮なものとなり、さらに躍動感にみなぎるような喜びに溢れて、そしてあなたはその喜びを自分の中だけに収めておくわけにはいかない。これは伝えずにはいられなくなる。それがクリスマスの喜びであります。一つ一つ考えてみて下さい。冬の時期に私はよくセブンイレブンで肉まんを買います。あの肉まんは中村屋の肉まんですが、中村屋の創業者もクリスチャンなんです。ですから彼がクリスチャンにならなければ、私は今日セブンイレブンで夜中でも肉まんを食べることは出来ませんでした。マクドナルドもそうです。日本マクドナルド創業者の藤田<sup>てん</sup>、もう亡くなってしまいましたけれども、田<sup>てん</sup>というのは、田んぼの田と書きます。母親がクリスチャンで、その田んぼの田に意味を込めました。口の中に十字架がある。それが田んぼの田です。息子には十字架のことを語ってもらいたい。十字架以外のことは口にすまい。そのような決心をしてもらいたい。そうなったかどうかは定かではありませんが、でもその藤田<sup>てん</sup>さんはクリスチャンとしてビジネスの世界でも成功した人として知られています。日本マクドナルド、またトイザラスもそうです。ですから T さんはたこ焼きをトイザラスのところで売っていますけれども、藤田<sup>てん</sup>さんがクリスチャンでなければもしかしたら今は北風にさらされて。今は北風を防ぐ素晴らしい施設で、トイザラスとマクドナルドのあるその施設で、そこでたこ焼きを焼いておりますけれども。これをまた切実な問題です。クリスマスの時期を考えてみて下さい。沢山の恵みが私たちの周りに溢れているんです。この喜びは尽きることがありません。そのことをまた今朝もう一度覚えて欲しいと思います。まずはあなたが、私がクリスマスの喜びに与ること。私のような心の中に、あなたのような心の中に、イエス・キリストが生まれて下さったこと。これは驚くべきことです。同時に、あの人の心の中にも、あんな汚い人間の心の中にも、こんな人の中にも、救いから程遠い宗教嫌いしている、キリスト教を毛嫌いしている、そんな人の心。また社会的に見下されている、つまはじきにされている、誰からも信用されない軽蔑されたそんな人の心にも、救い主は生まれて下さいます。『きょう、あなたがたのために』、という言葉がキーワードとなっています。「きょう」というのは、「この日」This day です。あなたがたのために、あなたのために、この日。それは 2011 年の 11 月 27 日。今日、この日のことで、今日が救いの日。まだこのクリスマスの喜びを知らない人たち、今日が救いの日です。この日のためにイエス・キリストは、あなたのためにこの世に来て、あなたの心に生まれ下さるわけです。ですからクリスマス体験というのは、キリストが心に生まれ下さる。その体験をしていない人は、今日この日です。あなたのために、あの人のためにイエスは生まれて下さるわけです。

クリスマスプレゼントは、毎年楽しみにしている人もいると思うんですけれども、子どもであればおもちゃだとかゲームだとか。女の子であれば人形であったり、大人であって彼氏彼女の関係であればお財布であったりバッグであったりアクセサリーであったり、楽しみです。時計がもらえるとか、楽しみです。でも本当のクリスマスプレゼントは、ヨハネの福音書 3 章 16 節に書かれているあのクリスマスプレゼントであります。『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』イエス・キリストこそが本物のクリスマスプレゼントです。イエス・キリストはあなたのために、あの人のために、救い主として、主キリストとして生まれて下さいました。本当に必要なのはおもちゃではありません。本当に必要なのは救い主です。本当に必要なのは赦しです。罪の赦しです。死んでもなくなる永遠の命です。おもちゃを貰って嬉しい、洋服を貰って嬉しい、それも確かに嬉しいかもしれませんが。でもそれらはすべて消えてなくなってしまうんです。窮地の時に、本当に苦しい時に助けてくれる存在。それが救い主であるということを先にお話ししました。英語でプレゼント”present”という言葉がありますが、同じ語源でプレゼンス”presence”という言葉があります。これは最近和製英語にもなっています。プレゼンスというのは、存在とか存在感を表します。よく例えば、アメリカ軍のプレゼンスが影響を与えている。沖縄とか、アメリカ軍が駐留してくれているので、北朝鮮だとか、また中国だとか、ロシアはそれでアメリカ軍のプレゼンスに、存在感によって日本にいろいろなことが出来ないというふうな言い方をするわけですけれども。そのプレゼンスという言葉は、存在とか存在感を表す言葉であります。プレゼントと似ているんです。

ビジネスの世界で、よくプレゼンテーションするなんてことも言います。それも同じ語源であります。類語であります。自分のプレゼンスをプレゼントするのがプレゼンテーションである、なんて言い方もされます。プレゼンテーションするのは、自分のプレゼンスを、自分の存在をプレゼントする。それがプレゼンテーションである、というような言い方をします。ビジネスの世界でそれは真理かもしれませんが、でもそれは神の世界において、霊的な世界において最も真理であります。神はご自身のプレゼンス、すなわち存在または臨在、それを私たちにプレゼントして下さったんです。そのプレゼンテーションこそがクリスマスなんです。クリスマスは神のプレゼンテーションです。神がご自身のプレゼンス・存在・臨在を私たちにプレゼントして下さったんです。

ですからイエス・キリストは、『インマヌエル』と呼ばれました。『インマヌエル』というのは、神が私たちと共にいる。神があなたとともにいる。プレゼンスがいつも一緒にあるんです。どこへ行こうと、何をしようかと、神があなたと一緒にいて下さるんです。たとえ死の影の谷を歩くことがあったとしてもです。「孤独である。病床でひとりぼっちです。」そういうことはありません。「この気持ちは誰にも分かってもらえない。」独り寂しく泣く。部屋に閉じ籠って布団の中で泣く。トイレの中で泣く。車の中で泣く。山の中で泣く。クリスチャンはそうではありません。イエス・キリストが共にいて下さるんです。プレゼンスはいつも共にあります。イエス・キリストは、**インマヌエル**の神であります。**マタイ 1: 23** に書いてあります。『「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)]是非、神のプレゼンテーションであるクリスマスのメッセージを受け取って欲しいと思います。イエス・キリストが、今日この日あなたの心の中に生まれて下さいます。ここに多くの人は既にそのクリスマス体験をした人たちであります。でも中には「もうその新鮮な喜びはどこかへ失せてしまいました。消えてなくなりました。初めてクリスマス礼拝に参加した時には、その時は感激しました。初めてクリスマスの意味を知った時は、初めて感激しました。」でも今は。あれから1年、2年、3年、いや30年、40年経って「もう、聞いた話。何度も何度も聞かされた話。もう喜びは失せた、褪せた。」という人もいるかもしれません。まだこのクリスマス体験をしていない人は、是非神のプレゼンテーションを受け入れて下さい、聞いて下さい。神のプレゼンスが、あなたにプレゼントされる日であります。それを今自分のものとするならば、今年のクリスマスはあなたにとって忘れ難い最高のクリスマスになると思います。でも覚えて下さい。来年はもっと素晴らしいクリスマスになります。もう既にこのクリスマス体験をしている私たちはそのことを知っております。今年も素晴らしいクリスマスになると思いますが、来年はもっと素晴らしい喜びに満ちたクリスマスになっていくわけです。それがクリスチャンの喜びです。クリスチャンの喜びは消えてなくなるものではありません。誰も奪い去ることの出来ない喜びです。その喜びは現状維持ではありません。その喜びは増し加わっていくものです。溢れるばかりになっていくものです。イエス・キリストのことが今はよく分からないかもしれませんが。でもイエスは確実にあなたが心を開けば、あなたの心の中に生まれて下さる方です。あなたの心がどんなに汚いか、悪いか、汚れているのか、イエスは承知の上であなたの心に喜んで生まれて下さいます。是非そのことを信じて欲しいと思います。週報にもイエス・キリストを信じることについて簡単に書いたものを皆さんにはお配りしていますので、また目を通して頂ければと思います。シンプルなメッセージですが、あなたの人生を一変するものです。私の人生も全く変えられました。イエス・キリストが私の心に生まれて下さらなかったならば、今私はここにもいませんし、恐らくは生きてもおらずあの世に行っていました。あの世というのは勿論天国ではありません。地獄をただ待つだけのハデスというところに落ちていたに違いありません。私はそういう人間でありました。そこに行くのが当然相応しいそういう生活をしてまいりました。でもそんな私も救われたんです、変えられたんです。そしてそんな私にもこんな喜びが与えられています。是非皆さんにも知って欲しいと思います。今日はこれで終わりたいと思いますが、12月25日クリスマス礼拝が用意されておりますので、是非その時までに今あなたが味わっているところの喜びを1人でも多くの人たちに分かち合っただけで欲しいと思います。そしてこの神のプレゼンテーションであるクリスマスに是非与ってもらいたい。声をかけて、そして誘って頂きたいと思います。もしイエス・キリストが私のような汚い心の中にも生まれて下さったならば、きっとあなたの心にもイエスは生まれて下さるはずであると、相違ないと確信を持って、相手の反応がどうであれ。羊飼いたちもそんな反応は恐れませんでした。

「自分たちの言うことを誰が信じてくれるだろうか。言ったって無駄だ。信じてもらえないに違いない。だって私たちは見下げられているし、馬鹿にされているし、普段から相手にもされない。」でもその喜びはそんな彼らの迷い、不安、それらすべてを吹っ飛ばしてしまいました。それほどの喜びであります。そのことも覚えて、羊飼いの身になってこのクリスマスを迎えて頂きたいと思います。